

Love Is A Many-Splendored Thing

慕情

Roma Trio

ローマ・トリオ

1. 慕情

Love Is A Many-Splendored Thing 〈S. Fain〉（5：11）

2. イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー If I Should Lose You 〈R. Rainger〉（4：35）

3. ウィスパー・ノット

Whisper Not 〈B. Golson〉（8：59）

4. エアジン

Airegin 〈S. Rollins〉（4：42）

5. オン・グリーン・ドルフィン・ストリート

On Green Dolphin Street 〈B. Kaper〉（5：22）

6. アイ・ラブ・ユー・ボーギー

I Love You, Porgy 〈G. Gershwin〉（4：36）

7. 二人でお茶を

Tea For Two 〈V. Youmans〉（5：28）

8. クラウディアズ・ナイトメア

Claudia's Nightmare 〈N. Angelucci〉（6：46）

9. 孤独のメッセージ

Message In A Bottle 〈Sting〉（7：42）

10. エブリシング・アイ・ラブ

Everything I Love 〈C. Porter〉（6：44）

ルカ・マヌツァ Luca Mannutza 〈piano〉

ジャンルカ・レンツイ Gianluca Renzi 〈bass〉

ニコラ・アンジェルッチ Nicola Angelucci 〈drums〉

録音：2006年7月2、3日　ワイド・サウンド・スタジオ、イタリア

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara

Recorded at Wide Sound in Italy on July 2 & 3, 2006

Engineered by Domenico Di Gregoria

Assistant：Fillippo Di Gregoria

Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：

Shuji Kitamura and Tetsuo Hara

Designed by Taz

ニア島のカリヤリで生まれている。4才のときからピアノの基礎を学び、地元の音楽学校を卒業したあと、しばらくはプログレッシブ・ロックやフュージョン系の音楽をプレイしていたという。ジャズに目ざめたのは92年頃からで、パオロ・フレスやスティーブ・グロスマンなど、イタリアにいた一流プレイヤーたちと共演。99年からはローマを中心にプレイをおこなういっぽう“マッシモ・ウルバニ賞”“マーシャル・ソラル・ピアノ・コンテスト”をはじめとする荣誉ある賞をいくつも得ている。近年はファブリツィオ・ボッソのカルテットや“ハイ・ファイヴ”をはじめとするトップ・グループでプレイをおこなっている。ベースのジャンルカ・レンツイは75年生まれ。マーク・ジョンソンやパレ・ダニエルソンといったトップ・プレイヤーについてベースを習得したあと、やはり多くの著名プレイヤーと共演を重ねてきた。自身でセクステットをもついっぽう、近年ではロザリオ・ジュリアーニやジョバンニ・ミラバッシをはじめとする多くの名コンビでプレイをおこなっている。ドラマー、ニコラ・アンジェルッチは79年生まれ。10代半ばで一流プレイヤーたちとステージに立ち、2000年には奨学金を得てシカゴに留学。イタリアに戻った2002年夏頃から、ピアニストのマヌツァとプレイをおこなうようになった。サクスのステファノ・パティスタの録音などに参加するいっぽう、ヨーロッパを中心に多くのジャズ・フェスティバルに参加して、ますます注目を集める存在になっている。

レコーディングの場所となったのは、ローマから車で東へ2時間ほどの町、テラモにあるワイド・サウンド・スタジオ。すでに気心の知れ合っている3人のメンバーだけに、録音はきわめてリラックスした、なごやかな雰囲気の中でおこなわれた。皆がセッションを楽しんでいるかのようなムードになったのは、“ローマ・トリオ”としてはこれが初のアルバムになるという期待

イタリアのジャズ・シーンから、またまた魅力的な個性あふれる、スリリングなピアノ・トリオがデビューを飾ることになった。ルカ・マヌツァ、ジャンルカ・レンツイ、ニコラ・アンジェルッチの3人からなる“ローマ・トリオ”は、星の数ほどあるピアノ・トリオの中にあって類を見ないほどユニークなジャズを演奏する。ここでとりあげられているナンバーは、ほとんどが良く知られているスタンダード曲ばかりなのだが、彼らはこれに新たな意匠をほどこすとともに斬新なアイデアを盛り込んで、今日のフレッシュな音楽に仕立てあげてみせるのである。確かなテクニクもさることながら“ローマ・トリオ”のサウンドとはびきりフレッシュで、しかも親しみやすく、美しい。聴きやすくて、奥の深い演奏。彼らのプレイを耳にしていると、ピアノ、ベース、ドラムスというオーソドックスなトリオ編成による表現に、まだまだ未開の可能性があるのだということも痛感させられるのである。

アルバム誕生のきっかけは、一年半ほど前の2006年初め頃にまでさかのぼる。そのいきさつについてヴィーナス・レコードのプロデューサー、原哲夫氏がこんな風に言っている。“若いアルト・プレイヤー、フランチェスコ・カフィーソのアルバム「天国への7つの階段」をローマで録音したとき、メンバーのひとりだったドラマーのニコラ・アンジェルッチから、自分でもトリオをもっているので、そのトリオの演奏も聴いてほしいって言われたんだよね。そのときは生で聴く機会はなくて、あとでテープを送ってもらったんだけど、あまりに素晴らしいので、すぐにレコーディングしようって返事を送ったんだ・・・”。そのときテープに含まれていた曲のいくつかは、このアルバムでも演奏されているナンバーだったという。“このトリオの大きなポイントは、3人のメンバーが対等の結びつきをもっていることだね。ひとりひとりのメンバーがとても個性的で、一緒になって音楽を作っている。グループ名も、もともとは3人の名前の頭文字をとってRAMトリオとなっていたんだけど、3人ともローマを中心に活動をおこなっているから、日本でのデビューのために「ローマ・トリオ」と名づけた・・・”

“ローマ・トリオ”の音楽が斬新なアイデアに溢れているといったが、具体的にいえばこのトリオの魅力の大きなポイントは、彼らのもっているフレッシュなハーモニー感覚と、自在かつスリリングなリズム・チェンジの面白さに尽きる。おなじみのスタンダード曲に正面から取り組みながら、彼らは自由にテンポを変え、あるいは変拍子をまじえて、作品そのものをまったく新しいものに作り変えてゆく。オーソドックスなフォー・ビート演奏にこだわることなく、リズムに変化をもたせることによって、慣れ親しんだメロディーがまた新たな光を放ち始める。3者がそれぞれの感性を縦横に発揮しながら有機的に絡み合い、しなやかな音楽の流れを作り上げてゆくのは、見事というしかない。変拍子による演奏といっても、彼らはけっしてそれを売りものにすることなく、スパイスのように隠し味として使ってみせる。けっして奇をてらうのでなく、むしろ変拍子であることを忘れさせるかのような自然で美しい響き。それは“ローマ・トリオ”ならではの感性のしなやかさであり、彼らの独自の音楽的センスなのだといえる。作品のアレンジも、3人のメンバーたちが、自由にアイデアを出し合ったものなのだという。言うまでもなくイタリアは“歌の国”であり、メロディーを明るく大らかに歌い上げる伝統は、彼らの血の中に脈々と流れている。そういったメロディックなセンスは、たとえ変拍子のプレイであっても変わらない。というよりも、むしろリズムに変化をもたせることによってメロディックな要素が際立つとともに、スリリングでスピード感あふれるものになっているのが“ローマ・トリオ”の音楽の何とも素晴らしいところである。

ピアニストのルカ・マヌツァは、1968年2月、地中海に浮かぶサルディ

感が込められていたこともあったのだろう。オープニングを飾る<慕情>は、サミー・フェインによって書かれた1955年の同名映画の主題曲で、この年のアカデミー主題歌賞を獲得した名作である。ここでのローマ・トリオの演奏は、ゆったりしたスインギーなテンポで美しいメロディーを弾き出したと思うと繰り返しの部分から意表を衝くアップ・テンポになり、さらにアドリブではスピードを上げて急速調になるという大胆な展開をみせる。途中ベース・ソロから、またもとのテンポに戻るという面白い構成がとられている。<慕情>のテーマが、このようなアレンジで演奏されたのは、おそらく過去になかったことだろう。続く<イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー>は、普通の4拍子によるプレイだが、やはりテーマ部には凝ったアレンジがなされており、ピアノ・ソロからスピード・アップした演出がとられている。<ウィスパー・ノット>は、ハード・バップ時代の名作曲家だったベニー・ゴルソンが1956年に書いた、彼の代表作のひとつ。ここでローマ・トリオは、何と7拍子！でこの曲を料理してみせる。このゴルソンのロマンティックなメロディーが変拍子で演じられたことは過去に例がないが、それだけでなく変則ビートをまったく感じさせない、流れるように美しいプレイが繰りひろげられているのに驚かされる。“まるでパッサのインベンションを聴くように、両手のバランスがとれたマヌツァのピアノ・タッチに感嘆させられた”とは、原プロデューサーの弁である。

次の<エアジン>が、また凄い。ソニー・ロリンズが54年に書いたオリジナルで、タイトルは“ナイジェリア”(Nigeria)を逆から綴ったもの。題名がパズルのようであるなら、ここでのマヌツァの右手と左手の動きも、まるでパズルのよう。いきなり無伴奏ピアノ・ソロから出て、微妙にリズムのアクセントをずらしたりしながら、スリリングに絡み合うタッチが圧巻である。スピーディな感覚に溢れた、21世紀型“エアジン”といえよう。<オン・グリーン・

ドルフィン・ストリート>では、ベースの特徴的なパターンによって7拍子のリズムが刻みだされる。変則ビートとスイング・ビートの巧みな交錯によって、スイング感がくっきりと浮かび上がってくることに注目したい。<アイ・ラブ・ユー・ボーギー>は、ジョージ・ガーシュインによって1935年に書かれた名作オペラ「ボーギーとベス」の中の一曲。テーマ・メロディーが比較的ストレートに奏でられるが、スローな5拍子によって、何ともいえない揺れるような浮遊感が生み出されてゆく。<二人でお茶を>も、6拍子を基本に5拍子を挟み込むという演出が面白く、3つの楽器がたくみなインタープレイを演じながら、スリリングなトリオ演奏に仕上げられている。

<クラウディアズ・ナイトメア>はアルバム中唯一、メンバーのオリジナルでドラマー、ニコラ・アンジェルッチの作品。夢幻的な楽想に彼の曲作りの上手さがよく出ていて、トリオのメンバーは隙のない一体感をもったプレイを聴かせてゆく。<孤独のメッセージ>はロック・グループ、ボリス79年の人気アルバム「白いレガッタ」の冒頭に入っていた曲で、バンドのベースistだったスティングが作曲した。これも6拍子を軸にした演奏で、テーマの凝ったアレンジとともに、ボリスのポップ・ナンバーが完璧な“ローマ・トリオ”の音楽として表現されている。<エブリシング・アイ・ラブ>は、コール・ポーターが作曲した1941年のミュージカル・ナンバー。アルバム中ではいちばんオーソドックスなフォー・ビート・プレイになっているが、マヌツァはクラシック的なテクニクもまじえて、限りなくロマンティックなタッチを繰りひろげてみせる。さりげない中に、トリオの音楽性の高さがよく示された演奏になっている。

岡崎 正通